

公的年金の積立金を運用する「年金積立金管理運用独立行政法人」(GPIF)は7月29日、2015年度の運用実績が5兆3098億円の赤字になったと発表した。

世界的な株安が影響した。運用実績で赤字になったのは2010年度以来、5年ぶりである。赤字の内訳では、国内株式(3兆4895億円)、外国株式(3兆2451億円)が大きかった。比較的安全な資産とされる債券は、国内が2兆94億円の黒字だったが、国外は円高の影響もあって6600億円の赤字だった。

運用を本格的に始めた2001年度以降で見ると、2015年度の赤字幅は、リーマン・ショックがあった2008年度(9兆3481億円)、2007年度(5兆5178億円)に次ぐ3番目の大きさとなった。

運用が大幅な赤字となった背景には、中国経済の減速への懸念などから、国内外の株価が大きく下落したことがある。2014年10月には、国内外の株式や債券の割合を定めた基本ポートフォリオ(資産構成)を変更し、国内外の株式割合の目安をそれぞれ12%から25%に引き上げたことで株価の影響を受けやすくなり、赤字幅を拡大させた。

ただ、今回の赤字を含めても、2001年度以降の累積収益は計45兆4239億円の黒字を維持している。運用収益などの年金積立金から得られる財源は、全体の年金給付額の1割程度で、今回の含み損が直ちに給付額に影響を与えるものではない。

GPIFは7月29日、2014年度末時点で保有していた全ての株式や債券に関する銘柄名や時価総額などの情報を初めて開示した。開示された情報によると、国内株は2037銘柄(時価総額31兆4671億円)、国外株式は2665銘柄(同29兆8040億円)を保有している。(2016/07/30)